中国語（漢語）から借用した日本語

岩　下　　隆

The Japanese Vocabulary borrowed from the Chinese Language

Takashi Iwashita

目　　次

はじめに
1．漢字と漢語の伝来のはじまり
2．物に伴って伝えられた漢語
3．聖徳太子時代の漢語の流入
4．大化の改新以降の漢語の流入
5．仏教を通じて定着した漢語（語彙）
6．科学技術や風俗習慣を通じて流入した漢語
7．一つの文字からなる語と熟語の流入
8．日本でつくられて中国語に流入した語彙
9．仮名の発明と日本語
10．意味の違う同形の語彙
おわりに

はじめに

近年、日本から中国に出かける人の数が急増し、中国から訪日する人の数も増加して、両国間の人の往来は年間で250万人に達している。３時間足らずで中国に到着し、空港ですぐ目に入ってくる案内や道路端の広告や看板など文字はすべて漢字で、外国に着いたという実感がしない。またテレビの画面も新聞や雑誌も漢字である。ときおり、簡体

字という見慣れない文字も含まれてはいるものの、おおよその類推が可能である。また中国人も同じように日本の看板や新聞などをかなりの程度まで理解できるようである。日中両国で、共通の漢字と同じ意味の語彙が多く使われていることは、コミュニケーションを図る上で便利なことである。

しかし、全く同じ形の語彙でも意味が全く違うものがあるため、思わぬ誤解を生む場合もある。

かつては朝鮮半島やベトナム地域にまで拡がっていた漢字文化圏は、今日では中国（台湾を含め）と日本だけになった。また世界に数千種類ある言語の中で、日本語と中国語（漢語）の存在と両者の特殊な関係は異色なものと言えよう。

2000年を超える日中関係の中で、日本は中国から言語の分野で大きな影響を受け文字と語彙が日本語に流入した。そのため、日本で使用されている漢字と漢字表記の語彙の70～80%が漢語からの借用語により占められているという情況である。

一方、明治以降には日本でつくられた語彙が中国語（漢語）に流入した。これは国際政治と文化的な関係で、日本と中国の立場に変化が生じたことの結果である。

いずれにしても、日本語（漢字の部分）と中国語（漢語）には全く同形の語彙が多く存在しているのである。本稿は、この2つの言語の関係を歴史的に追いながら、日本語に於ける漢語（中国語）借用の実態について考察を試みるものである。なお同形文字蒐集の際には、『中日同形詞浅説』（何培忠　冯建新著　商務印書館　1986年）等を参考にした。

1．漢字と漢語の伝来のはじまり

20年ほど前までは「中国における文字（漢字）の起源は、黄河文明にある」とされてきたが、近年長江文明（稲作農耕文明）の存在が明らかになり、[1]　杭州市郊外（余杭市）の良渚遺跡[2]からBC3500年の原始文字が刻まれた陶器や玉器が見つかった。これにより西安の半坡遺跡の彩陶の上に刻まれた原始文字にも匹敵する文字文化が長江流域にあったことが判明した。筆者が直接観察した時、良渚の原始文字の方が西安半坡のものよりも現在の漢字に似ているとの印象を受け、「良渚文明滅亡後にその成果は夏王朝に引き継がれて、さらに殷王朝に継承された」とする長江文明系譜の仮説[3]を裏付ける史料の一つとの認識を新たにした次第である。

19世紀になって、BC1500年頃の殷王朝の都とされる殷墟が発見され、そこから大量の文字を刻んだ獣骨が発見されたが、これが今日の漢字の直接のルーツとされている。

当時の日本は縄文時代に当たり、「未だ本格的な農耕文化の段階ではなく独自の文字はなかった」とするのが定説となっている。その後、紀元前300年頃より大陸や朝鮮半島から渡来する人の数が増大した。このような渡来人の手によって、中国の文字（漢字）が日本へ伝来したのである。

日本最古の歴史書『日本書紀』には、4世紀末「応神天皇16年に百済から王仁が各種の漢籍と経典を伝えた」とあり、また『古事記』には「王仁が『論語』10巻と『千字文』を伝えた」と記されている。これが漢字の最初の伝来とされているが、これは日本の貴族社会の中に漢語がすでに伝播していたことを意味するものであって、必ずしも最初の伝来の事実を記したものではない。むしろ、中国の『漢書』(4)の中に、1世紀後半の日本及び日本との正式交流に関する記述があることから、日本への最初の漢字の伝来は1世紀まで遡って考えるのが妥当と思われる。当時の中国大陸では600年間続いた殷王朝(5)が、BC1027年に周に滅ぼされた。周王朝(6)は285年間の安定期の後500年間の春秋戦国時代を迎え、各地に国家が乱立し急速に統制力を失っていった。戦乱の世に終止符を打ったのが秦であり、BC221年に戦国の覇者として統一を達成して、強権により文字の統一を行なった。これにより、それまで各国で独自に使われていた文字は完全に抹殺されて、秦国の文字が押し付けられる形で文字の統一がなされたのである。秦帝国は始皇帝の下で急進的な改革を断行し、大陸統治の枠組みをつくったが、その後各地に起こった農民の反乱の結果、統一後15年で崩壊した。新たに成立した漢帝国は、秦が行った改革と統一の成果の上に立って帝国の運営を進めたが、詳しくは別稿(7)で触れているのでここでは省略する。

このようにして日本へは、秦帝国の末期から漢帝国の時代に至るまで中国で使われていた文字（漢字）が伝えられたのである。

2．物に伴って伝えられた漢語（語彙）

弥生時代の福岡県須玖遺跡から中国製の青銅器と剣や瑠璃製の勾玉等が発見されているが、これらは墓の副葬品として、付帯する文字とともに大陸から伝来したものであると言われている。

『日本書紀』には598年に「朝鮮半島の百済から日本の天皇に駱駝（ラクダ）一頭と驢馬（ロバ）二頭、羊二頭、白雉が贈られた」とある。鳥獣類の中で当時の日本にいなかったものが、朝鮮半島を経由して伝えられたと思われる。朝鮮半島は当時、漢帝国の支配下にあったため文字は漢字が使われていたのである。このほかに次のものが伝えられた。

(1)　動物

孔雀、鸚鵡（オオム）、水牛、麒麟、獅子、猩猩、雁、九官鳥、十姉妹、象、山羊、豹、猫、法螺、珊瑚など。

(2)　植物

芭蕉、紫檀、白檀、石楠花（シャクナゲ）、稲、麦、高粱、胡麻、白菜、梨、柿　銀杏、椰子、菩提樹、肉桂、蜜柑、金柑、山茶花、百日紅、南天竹、豌豆（エンドウ）、西瓜、南瓜（カボチャ）、落花生、水仙、石竹など。

但し次のものは、日本名がつけられたが、後に漢語に取って代えられたと思われる。蘭、菊、牡丹、桔梗、甘草、人参、大豆、杏など。

(3)　金石玉器

宝石、翡翠、真珠、金剛石、水晶、砂鉄など。

(4)　文具関係

筆、墨、紙、文具、便箋、文鎮など。

(5)　楽器関係

琴、琵琶、太鼓、横笛、喇叭、銅鐸など。

3．聖徳太子時代の漢語の流入

推古天皇の摂政であった聖徳太子の時代に、漢字で書かれた典籍が日本に伝えられて日本の文化に大きな影響を与えた。その年代が比較的明らかなものについて、次に取

り上げたい。

『論語』[8]と『千字文』[9]は、応神天皇の時代（4～5世紀）に日本に伝えられていた。また6世紀末から7世紀初めの推古天皇の時代には、日本の漢学のレベルは相当な高さに達していたと考えられる。当時編纂された『天皇記』、『国紀』、『憲法十七条』[10]によって、そのことは裏付けられる。これらが編纂された背後には、勢力を伸ばしてきた蘇我氏に対して、先進的な中国の政治制度や思想を取り入れて古代天皇制を強化して対抗しようとする聖徳太子の意向があったのではないかと思われる。

聖徳太子は5歳の頃から漢字を学び、儒教や仏教の漢籍を読破して、14歳の頃には渡来人もかなわないほどの深い知識と学問（漢学）を身につけていたと言われている。607年に彼は小野妹子らを遣隋使として中国に派遣し、仏教と儒教の双方の長所を取り入れようとした。『憲法十七条』の中には、この双方の精神が反映されている。その中で漢語による原典からの直接的影響があると考えられる箇所を抜粋すると次のようになる。（　　）内は原典の該当箇所である。

『憲法十七條』

一より

以和為貴　（『論語』：禮之用和為貴）

人皆有党　（『左傳』：亡人無党、有党必有仇）

亦少達者　（『左傳』：吾聞将有達者曰、孔丘聖人之後也）

乍違于鄰里　（『論語』：子曰、毋以与爾鄰里鄕党）

上和下睦　（『千字文』：上和下睦）、

二より

万国之極宗　（『易』：万国咸寧）

三より

承詔必謹　（『尚書』：承詔為五十九篇）

君則天之、臣則地之（『管子』：君臣者天地之位也）

天覆地載　（『禮記』中庸：天之所覆地之有載）

四時順行　（『論語』：四時行焉、百物生焉）

4．大化の改新以降の漢語の流入

儒教と仏教を信奉した聖徳太子の時代には、前述のように漢籍を通じて多くの漢字が日本語に流入した。文字文化のなかった古代日本の支配層は、漢字を用いて行政を行うとともに大陸の思想を導入して文化的レベルを向上させ、天皇制による政治の安定化を図ろうとしたのである。聖徳太子は古代中国の君主制をモデルに政治を行おうとした。しかし、622年に聖徳太子が死去した後は、蘇我氏が再び権勢を振るうようになる。

それに対して、中国留学から帰国した南淵請安の影響を強く受けた中大兄皇子（後の天智天皇）が、藤原鎌足らの協力を得て、645年に亡き聖徳太子の理想実現という大義名分によりクーデターを断行した。これが大化の改新である。これにより文化教育の面では、中央に大学、地方に国学が設けられた。大学の中には明経道、紀傳道、明法道、算道の４つの学科が設置された。明経道では『禮記』[11]、『左氏傳』[12]、『毛詩』[13]、『周禮』[14]、『儀禮』[15]、『周易』[16]、『尚書』[17]などの講義がなされ、明法道では日本の律令[18]が講義された。紀傳道では『史記』[19]、『漢書』、『後漢書』[20]などの三史のほか、『文選』[21]、『爾雅』[22]が講義された。

８世紀になり孝謙天皇は、臣民に対して『孝経』[23]を各家に一冊備えさせ真剣に読誦するよう命じた。８世紀に編纂された万葉集の中に『抱撲（朴）子』[24]、『遊仙窟』[25]などの漢籍の名称が見られるが、さらに「孔子曰・・」とか「曾子曰・・」などの表現も見られることから、当時日本ではかなり漢籍が読まれていたと考えられる。東大寺正倉院には、『楽毅傳』、『列女傳』、『方言』、『経典釋文』、『陰陽書』など67種類の漢籍が伝来し医薬関係の書も含めて、１万点以上の文書が保管されている。９世紀、平安時代に嵯峨天皇、仁明天皇が漢学を提唱し漢籍の輸入が一段と進んだ。藤原佐世が編集した『日本国現存書目録』には、「９世紀に於いては40の流派で合計1万7,734巻の漢籍が伝来した」と記されているが、875年の火災で「冷泉院が焼けたとき、珍蔵されていたこれらの多くの歴代漢籍が焼失した」と言われている。

10世紀に出された『倭名類聚鈔』には250種類余りの漢籍のリストが載っている。今まで取り上げた漢籍以外には『山海経』[26]、『古文尚書』、『穆天子傳』[27]など70種余りが列挙されている。

このようにして、漢籍を通じて多くの漢語が日本語に取り入れられ、そのまま日本語の語彙として定着していったと思われるが、今日でも使われている語彙の一部を取り上げてみたい。

(1)『春秋左氏傳』[28] を通じて伝来した漢語（語彙）

即位、黄泉、凶事、首領、来朝、王室、徳政、五色、文物、声明、百官、国家、義士、不敬、設備、婦人、武事、不可、不徳、衣服、歌舞、教訓、負担、出獄、先君、聡明、正直など。

(2)『晋書』[29] を通じて伝来した語彙（奈良時代前後に伝来したと思われる）

短小、体力、懇切、名言、門徒、事情、博愛、開拓、顕著、職務、休息、死亡、布告、自然、自由、目下、騒動、後進、機械、挙動、寶（宝）物、有識など。

(3)『荀子』[30] から流入した語彙

学問、順風、高山、修身、動静、血気、便利、広大、政事、末世、学者、思索、権利、成人、禽獣、滅亡、内省、貧窮、横行、私欲、大過、道理、容貌など。

(4)『文選』から流入した語彙

朝夕、娯楽、反復、風俗、学校、時節、鮮明、指南、前駆、経營（営）、生命、皇統、遊覧、世俗、嘆息、平生、変化、悲哀、猶豫（予）など。

(5)『世説新語』[31] から流入した語彙

測量、優劣、不足、裸体、危急、暴雨、矮小、鼓舞、離婚、料理、親戚、僕、幕府、聖賢、上流、暗室、不浄、高遠、骨肉、律令、消息、門下、不測、才気、理屈、奇抜、一生、品評、我輩、伝授、号泣、喧嘩、黙然、自若、識者、諸君、艱難、名月、評論、貧乏、風流、顔色、任意　奇人、賓客、意表、腹心、領袖、寡欲、万物、棟梁、名士など。

5．仏教を通じて定着した漢語（語彙）

紀元前６～７世紀にインドで開基された仏教は、１世紀の頃、漢（東漢・前漢）の時代に中国に伝わった。その後、三国、晋、南北朝の400～500年を経る中て、仏教経典の翻訳や研究が進み宗教として確立した。隋唐の時代に仏教は天台、華厳、唯識、禅宗、浄土、密宗など特色ある宗派に分かれて発展した。日本からの留学僧は中国で翻訳された仏教経典を学び、またそれらをコピー（写経）して日本にもたらし、それぞれの宗派の立場で布教活動を行った。このため、古代日本の人々には仏教の精神とともに多くの漢語（語彙）が受け入れられ、それが日常生活用語の中にも定着して今日に至ったものと思われる。それらのいくつかを拾ってみたい。

(1) 仏塔や仏具関係の語彙

塔、舎利、金堂、講堂、食堂、鐘楼、僧坊、高座、香炉、如意　鉢、袈裟、頭巾など。

(2) 仏教経典の中の語彙

煩悩、自在、彼岸、一切、不可思議、智慧、精進、未曾有、世間、世界、過去、光明、神通、一心、演説、方便、合掌、引導、分別、慇懃、清浄、迷惑、我慢、供養、正直、安穏、請願、増長、功徳、乃至、常住、貧窮、大悲、思惟、差別、未来、称賛、出家、志願、頑固、疑惑、堕落、利益、馳走、娯楽、不浄、救済、飢渇、貪欲、解脱、凡夫、下賤、離別、子息、財産、長者、愚劣、出現、平等、慈悲、決定、修行、来世、無上、奇妙、安楽、端正、救護、減少、奇特、功徳、言論、仏事、虚空、変化、勇猛、寿命、知識、法師、説法、唱導、疲労、問答、教誨、肉眼、坐禅、施主、地獄、畜生、良薬、飲食、擁護、夢中、短気、極楽、黄金、供養、障碍、因縁、顛倒、一期、堪忍、看病、境界、帰依、過去、観念、現在、後生、乞食、懺悔、色欲、自覚、執着、荘厳、邪魔、接待、畜生、息災、道具、油断、無常、肉眼、往生、圓（円）満　など。

6．科学技術や風俗習慣を通じて流入した語彙

古代日本は中国から先進的な技術を取り入れてきたが、青銅器と鉄器をつくる技術とともにその製品名が伝えられた。また稲作技術や農作物の種子と人体の部分の名称をはじめ、地理、天文、気象、工芸、建築、医学、薬学に関する知識とその語彙が伝えられて定着した。それらには次のようなものがある。

(1) 青銅器と鉄器関係

銅鏡、剣、鉄など。

(2) 農作物関係

人参、大黄、甘草、牡丹、水仙、芍薬、胡椒など。

(3) 人体の部分と病気関係

頭、面、耳、毛髪、心、手、足、指、膀胱、脳、肝、脾、肺、腎、大腸、口、胃、痔、脚気、喘息脱肛、黄疸、丹毒など。

(4) 地理や天文気象の関係

熱帯、寒帯、温帯、火山、瀑布、道路、盆地、地震、海洋、海峡、海流、潮流、岩石、土砂、鉱山、平原、山地、太陽、月、日食、赤道、新月、北極、北斗、木星、火星、土星、金星、水星、地球、恒星、彗星、流星、衛星、暴風、台風、梅雨、夏至、冬至、立春、春分、秋分など。

(5) 建築関係

殿、堂、院、楼、廊、亭、柵、瓦、天井、柱、門、寺、廟など。

(6) 衣食文化や風俗習慣の関係

布、錦、紬、頭巾、靴、草履、浴衣、袴、蜜、醤油、豆腐、饅頭、羊羹、囲碁、競馬、相撲、正月、端午、七夕、幕、帳、屏風、障子、椅子、床、樽、灯篭、灯台、鏡台、瓶、盆など。

7．一つの文字からなる語と熟語の流入

漢字は表意文字であるため、漢字一文字が「ことば」として独立した意味を持っている。この点では世界のほとんどの言語がローマ字のような表音文字で表記されていることを考えると、漢語は極めて異色な存在である。

古代日本には文字がなかったため、漢字の知識をもった渡来人が行政面の記録などで活躍するようになった。また日本列島にあった「大和ことば」は、表記の方法がなかったので、そのことばの意味に該当する漢字に置き換えられて表記されるようになった。

(1) 一つの文字の同形語

ア　日本語の漢字音に近いものを列挙すると次の通りである。

案、愛、以、意、印、引、看、三、新、信、南、民、利、里など。

イ　読み方が違うものは次の通りである。

（　）内は現在中国で使われている簡体字である。

運（运）、役、戒、階、寒、機（机）、期、禁、行、局、玉、具、軍（军）、課（课）、下、景、石、子、主、州、臣、社、上、首、順、族、堂、中、日、木、品、目、力、文、明、暗、一～十の漢数字、百、千、万、億（亿）天、地、風（风）、雨、電（电）、山、水、土、田、年、夜、人、父、母、手、老、少、牛、馬（马）草、米、豆、油、酒、肉、打、立、解、記（记）、死、病、先、後（后）、前、早、大、小、音、刀、生、産（产）、謝（谢）、進（进）、説（说）、想など。

（漢字の読み方に日本と中国で違いが発生したのは次の事情による。①漢字が伝えられた頃は現在の日本式の読み方であったが、中国でその後に読み方が変わった。②漢語の音節は400程度であったが、大和ことばは80程度の音節であったので、古代日本人の耳では細部の微妙な違いが識別できず、限られた数の音節の読み方に合わせてしまった。）

近年日本で発行された漢和辞典（小学館の新選漢和辞典　1963年）によると、親字は１万１千字ほどであるが、日本でつくられた峠、辻、働などの国字も一部分載ってはいるものの、殆どは中国でつくられたものである。これらは全て中国語（漢語）からの借用語とみなして差し支えないと思われる。

(2) 二文字の同形語

ア　各漢字が独立の意味を持ち、2語から成っている語彙は次の通りである。

参観（参观）、永遠（远）、豊（丰）富、栄誉（荣誉）、防衛（卫）、簡単（简单）、健康、優（优）秀など。

イ　二文字の意味がほぼ同じで、一つの語彙を形成しているものには次のものがある。
山岳、河川、岩石、道路、倉庫、君主、宮（宫）殿、学校、根本、言語（语）、差（差）別、康、土壌、丘陵など。

ウ　意味が相反する二つの文字からなる語彙は次の通りである。
天地、日夜、文武、男女、父母、夫婦（妇）、兄弟、姉妹、君臣、古今、手足、喜怒、内外、左右、東西など。

エ　後の字が主体で前の字が修飾語となっている同形語は次の通りである。
高山、深山、名山、大海、大地、武士、名士、美女、文盲、天才、先輩（辈）、大敵、名医、大事、台風（风）、兵法など。

オ　前の字に主な意味があるものは次の通りである。
地下、国内、室内、廊下など。

(3) 三字からなる同形語は次の通りである。
山茶花、金剛石、葡萄酒、脳貧血、農（农）作物

(4) 四字からなる成語の同形語

北京の商務印書館出版の漢語成語小詞典（1973年）には3,013の成語が載っているがその中で現在も日本で使われているものはそれほど多くはなく、以下に示す程度である。

一言半句、羊頭（头）狗肉、士農（农）工商、象形文字、世襲（袭）財産（产）、文武両道、森羅（罗）万象、大同小異（异）、子々孫（孙）、臥薪嘗胆、一刻千金、一挙（举）両（两）得、一刀両（两）断、一目瞭（了）然、一衣帯水、一朝一夕、一知半解、三位一体、四面楚歌、九死一生、切磋琢磨、虎視眈々、弱肉強食、百発（发）百中、半信半疑、単（单）刀直入、画竜（画龙）点睛、急転（转）直下、面目一新、拍手喝采、千変（变）万化、

千差（差）万別、先見之明、四分五裂、言行一致、一触即発（发）、一網（网）打尽、再三再四、唯我独尊、朝三暮四、自暴自棄（弃）、自給自足、自力更生、各個（个）撃（击）破、百戦（战）百勝（胜）、象牙之塔など。ただし次のものは日本では使われているが中国では使われていない。

絶体絶命、無我夢中、我田引水、一所懸命、正々堂々、是々非々、五里霧中、一心不乱、人跡未踏、事後承諾、正真正銘、不言実行、無理難題、理路整然、無理矢理、縦横無尽など。

8．日本でつくられて中国語に流入した語彙

明治以降日本から中国語（漢語）に入った語彙は政治、経済、社会、行政、法律、学術、医学、娯楽など多くの分野にわたっている。学術用語は日本で西洋の書物から翻訳された語彙が多いが、中国留学生が日本語の中からそれらを学び取り、帰国してから著作の中などで使用したために中国語に定着したものが多く、また経済、社会関係の語彙もほぼ同様に翻訳語であり、日本に身を寄せたり亡命していた中国の進歩的知識人達を経由して中国語に入ったと言われている。また「満州国の建国」に代表される日本軍の中国支配という政治情勢の中で流入した行政や法律関係の語彙も多い。そしてそれらは現代中国の人々が社会生活を営む上でも必須の語彙となっているほど、深く浸透し言語のみならず、社会にも大きな影響を与えてきたのである。そのような語彙を次に掲げたい。ただし、簡体字は省略してある。

社会、闘争、革命、文明、政治、経済、進歩、思想、世界、選挙、主席、共和、批判、文化、保健、身分、立場、復習、服務、交通、方針、認可、市場、想像、作物、派遣、報告、物質、美学、抽象、代表、断交、電車、独裁、現象、概念、法学、調整、表現、取消、手続、申請、布告、方法、修正、幹部、民主、生物学、化学、科学、改良、目的、左翼、政策、生産力、商業、新聞、主義、唯物論、唯心論、特務、財閥、独占、客観、哲学、自治、反動、注射、運動、計算、訪問、存在、組合、集団、管理、意識、演奏、灯火、探索、現実、背景、常識、広告、漫画、意外、重視、革新、拡大、打倒、説明、解散、治外法権、遊撃戦など。

また日本でつくられた文字をベースに、中国で再び合成された熟語には次のようなも

のがある。

経済封鎖、資本輸出、資金凍結、階級分析、技術革新、人材開発、設備開発、海外調査など。

9．仮名の発明と日本語

日本語と漢語は、言語学の分類上は全く異なった系統にあるとするのが定説である。音声的にも語法的にも両者の相違は大きい。そのため、日本語を表記するためには表意文字の漢字だけでは不可能であり、表音文字が必要であったのである。そのため漢字音にヒントを得て、日本語の音節に近い漢字の一部分を抜き出して新たに表音文字を作ったのである。これが片仮名と平仮名の発明という画期的な出来事であった。これにより「話し言葉」も簡単に書きとめることができるようになった。このような仮名体系は9世紀には完成していたと思われる。また仮名の使用により語彙と語彙の関係を明示できるために、より正確に情報を伝えることが出来るようになったのである。

漢字は中国での読み方（音）を伴って伝えられたが、大和ことばの意味に合わせてその漢字を読ませるというかなり乱暴な方式が採用された。山をヤマと読み、雲をクモと読む「訓読み」の方式がそれである。このようにして、漢字の読み方には音と訓の二通りの読み方が生じることになった。

日本語は表音文字と表意文字の両方を用いて発達した。もちろん仮名だけでも日本語は表せるし、ローマ字でも表記できるわけであるが、漢字を用いることで視覚的に意味が把握できるという利点は無視できない。その半面、結果として日本語は複雑な様相をもつ言語となった。そのため表音文字だけの言語に慣れている外国人が、日本語を完全にマスターするには、かなりの努力が必要となっているのも事実である。

10. 意味の違う同形の語彙

同じ形の語彙でも日本語と漢語では意味の違うものがある。これらには次のようなものがある。（　　）内は漢語で理解した場合の意味である。なお簡体字は省略する。

勉強（強制する）、手紙（トイレットペーパー）、花子（乞食）、汽車（自動車）、湯（スープ）、中西（中国と西洋）、東洋（日本）、新聞（ニュース）、表（時計）、明白（分かる）、

丈夫（夫）、工夫（時間）、東西（品物）、便宜（安い）、告訴（告げる）、老婆（女房）、愛人（妻）、妻子（妻）、利害（ひどい）、打算（～するつもり）、走（歩く）、猪（豚）、鴨（アヒル）など。

また、漢数字の表し方には一部違いがある。
例えば、二百一は210のこと。中国語での201は「二百零一」と表記する。（中国語では百の次の数字は十の位を示す。）一千一は1100を意味する。中国語では1001は「一千零一」と表記する。（中国語では千の次の数字は百の位を示す。）

おわりに

文化は高い方から低い方へ流れると言うが、古代に先進的な文化を保持していた中国大陸から、日本列島に稲作文化を中心にして多くの文物が流入した。また2200年ほど前の秦時代には、『徐福と始皇帝』[32] の中で、中国の徐福研究者の多くの論文に「秦の始皇帝の圧迫を逃れて、徐福に代表されるような大量の亡命（移民）が日本に対して行われたが、彼らは文化難民ともいえるだろう。」と共通的に述べられているように、彼らによって日本にもたらされた文物は多い。さらに朝鮮半島からは、渡来人が日本に文字や仏教及び製鉄技術などのハイテクを伝えた。また海に囲まれた日本は、南方諸島の人々から漁労技術などの文化を受け継いでいる。このようにして、アジアの人々との盛んな交流の中で、日本人の祖先が生まれたのである。そして我々日本人のことばは、大陸のみならずこれらの地域の言語も取り込みながら重層的に構築されてきたのである。本稿では、特に影響が強かった漢語との関係のみに絞って考察してきたが、日本語をアジア全体の言語文化圏の中で捉えてゆく視点は忘れてはならない。その視点に立っての考察は今後の課題としたい。

注

（1）黄河文明に1000年先立ち稲作文化を中心に長江流域に形成され、今から4200年前に滅亡した古代文明。最近研究と発掘が進み、夏王朝までの空白を埋めるものとしての位置付けがされている。NHKテレビ「甦る長江文明」で放送。（2000年9月）。拙稿「古代中国人

の信仰と生活」：長江文明の曙（『文化女子大学紀要10集』2002 年）参照。

（2）今から5300年前頃より4200年前に至るまで繁栄した稲作と玉を中心とする古代文明、良渚は文化圏の中心（都）であったとされているが発掘はあまり進んではいない。角川選書『長江文明の発見』徐朝龍1998年。また（1）で触れた拙稿参照。

（3）拙稿「古代中国人の信仰と生活」：良渚文明（『文化女子大学紀要10集』2002 年1月　112頁）

（4）後漢の班固の撰。120巻。地理志には「前1世紀の倭（日本）が100余の小国に分裂、それらが中国王朝と交渉を持った」と記されている。

（5）前16世紀から前1043年までの王朝。青銅器文明の王朝で奴隷制社会でもあり、周に滅ぼされた。

（6）前1042年に成立。孔子は周公の政治を理想とした。西周は12代、285年間続いたがその後東周時代500年間は春秋戦国時代に当り群雄が割拠した。その中で秦が台頭し統一し秦帝国を成立させた。

（7）拙稿「信長と始皇帝」（『文化女子大学紀要』2003年1月）

（8）孔子やその門弟の言行を記したもの。10巻20篇。孔子の死後、今から2000年ほど前に編纂。（『論語正義』中華書局1990年。岩波文庫『論語』1963年）

（9）周の時代の梁の周興嗣の撰。1巻。4言古詩250句、1千字からなる。古事記の記述は小学書の間違いとの説もある。

(10) 604年に聖徳太子がつくった。論語と仏教の法華経などからの引用句が多い。

(11) 周末秦漢の時代の礼に関する諸説を集めたもので礼に関する理論と実際を記録している。

(12) 春秋左氏伝のこと。30巻。作者に諸説あり。『春秋』の注釈書。（春秋とは魯の歴史について孔子が筆冊したものであり12代、242年間の善悪を弁じ名分を正し、大義を掲げ天下後世に尊王の道を示している。）

(13) 詩経をいう。漢初に毛亨が伝えた詩経をさす。（詩経とは孔子が3000余篇の中国最古の詩から305篇を選び、編纂したという。）

(14) 経書（儒教の書）の名。周公亘の撰と伝えられる。天地春夏秋冬に象って官制を立て、その職掌を細記している。中国歴代王朝の官制は多くこれによっている。

(15) 経書の名。周公亘の作。「ぎらい」と読む。冠婚葬祭などについて記している。

(16) 周代の易。（易とは陰陽2気を根源として万象の変化を考え、宇宙を統観し、人事をきわめ、天地人のあらゆる理法を究明しようとするものである。）

(17) 虞夏商周時代までの政道を記した書で孔子が編纂した。虞夏とは舜と禹の時代をさす。

(18) 奈良平安時代の法令

(19) 130巻。司馬遷の撰。黄帝から漢の武帝までの約2千数百年の事績を継いで編んだもので、52万6千5百字に及ぶ歴史書

(20) 120巻。後漢1代のことを記した歴史書で紀伝体（個人の歴史を中心に書く書き方）で書かれている。

(21) 30巻。周から梁までの作家百数十人の詩賦文章を約8百篇を選び集めたもので、現存する詩文集では最古のものとされている。

(22) 文字を説明したもので、字書中で最古のもの。作者は孔子の作とし、詩書六芸を解釈するためのものとしているが、魏の時代に至り、周公の作と称した。

(23) 1巻。13経の1。曾参の門人が孔子と曾参の孝道に関する問答を筆録したもので、秦の焚書のとき顔芝が深く蔵していて、漢初の文帝のとき、その子の貞之が世に公にしたものを今文孝経といい、武帝のとき、尚書･論語とともに、焚書を逃れて壁中から得たものを古文孝経と呼ぶ。

(24) 8巻。晋の葛洪の撰。道家の言であるが、神仙などのほか時政の得失、人事の可否を論じて黄帝と老子を主としている。

(25) 唐代小説の篇名。妓楼妓館の遊楽を美化した好色的な小説で日本では珍重された。また美辞麗句の宝庫で用語字典としても使用された。

(26) 18巻。古代の神話と地理の書である。神怪の説の多いところから小説類にも入れられている。西山経の西王母の話は有名である。

(27) 6巻。撰者不明。小説書の最古のもの。周の穆王が天下を旅し西王母と会ったりする。四川省の三星堆の女帝が西王母とする仮説を裏つけるヒントを提供する物語である。参照：拙稿「古代中国人の信仰と生活」：三星堆文明の物語るもの（『文化女子大学紀要10集』2002年1月　120頁）

(28) 左氏伝と同じ。12）の項で説明

(29) 130巻。唐の太宗が命じて晋から六朝までの歴史をまとめさせたもの。特に有名な18家の晋史を参考に藏栄緒の晋史を本に編纂した。しかし、18家の史書は唐時代以降失われたため、その内容は本書により推定せざるを得ない。

(30) 書名。20巻。周の荀況の撰。彼の性悪説によりその後に法家が出て秦の時代に活躍

(31) 六朝時代の劉義慶の撰。徳行と、言語、政事、文学、方正、雅量などの門に分け、後漢から東晋までの嘉言、佳話等を集めたもの。

(32) 池上正治　『徐福と始皇帝』　勉誠社　1997年

参考文献

林華東『良渚文化研究』浙江教育出版　1998年
何培忠『中日同形词浅说』商務印書館　1986年
商務印書館編『漢語成語小詞典』 1973年
唐蘭『中国文字学』上海古籍出版社　1949年
（晋）郭璞　注　『山海経・穆天子傳』古典名著普及文庫　岳麓書社出版　1992年
平凡社版『抱朴子　山海経』 1973年
近藤春雄『中国学芸大事典』大修館書店　1978年
田希誠『語音常識』山西人民出版　1974年
中華書局出版『論語正義』 1990年
文物出版社『西安半坡』 1986年
白川静『字統』平凡社　1984年
白川静『漢字』岩波書店　1970年
中国語学研究編『中国語学新辞典』光生館　1969年
望月八十吉『中国語と日本語』光生館　1974年
藤枝晃『文字の文化史』岩波書店　1970年
中村新太郎『日本と中国の二千年』東邦出版社　1972年
安藤彦太郎『中国語と近代日本』岩波書店　1988年
家永三郎『日本文化史』岩波書店　1982年
望月八十吉『新しい中国語・古い中国語』光生館　1985年